

会話の話題展開における規範^①の分析 —授業中の話し合いを例にして—

小笠 恵美子

要旨

現在、多くの留学生がゼミなどに参加しているが、そこではその場にあった話し方をすることが求められる。本稿では授業中の会話の話題に注目し、話題の展開にどのような規則性があるかを明らかにした。方法としては、村上・熊取谷(1992)の提唱する「階層構造」により、テキスト全体から見て、各話題が内容の上でどのような関係を持っているかを分析した。その結果、会話はレジюмеや文献を中心に進められ、それに関係ない話題は派生しないことがわかった。一方、レジюме等に関する話題は派生をするが、本題からずれてしまわない程度にとどまるということがわかった。会話に参加している学生にこれらの意識をアンケートで調べたところ、本稿で対象としたような少人数で話し合う活動では、話題の順序などは考えないという答が多かった。つまり、学生は無意識のうちに、話題の展開のさせ方について一定の規範を共有しているといえる。

【キーワード】 規範、話題、階層構造、話題の派生、話題の選択

1. はじめに

日本語学習者の中には、大学、大学院で学ぶことを目的とする者も多く、彼らはゼミなどで、相手の言うことを理解し、その場に合った発言をすることが必要になってくる。しかし、ゼミなどの進め方には発話順序など、人間関係を考慮した上での発話の仕方のスタイルがあり、それにのっとなって、その場その場の「話」をしていくことに困難を感じる留学生もいる。

文化人類学の分野では、教室内での会話を分析することによって、その場面を支配している規範を明らかにしている(Heath:1987, Gee, etc.:1992)。ギーら(Gee, etc:1992)は授業中の教師と学生の会話を分析し、教師の質問に答える際に、一見本題との関係が無関係な説明をしようとする学生の例を出している。この場合、教師は学生に質問に答えるように指示を繰り返す、結局学生は混乱して話を続けることも、質問に答えることもできなくなった。

これは教師が考える話題の展開方法と、学生が所属する文化での話題の展開方法が異なることが、原因とされている。教室内での発話は教師が属する文化の下に決められたルールがあり、このルールを身につけていない者は、適切な発話ができなかったり、教師の指示の意図がわからなかったりする「落ちこぼれ」と見なされることが明らかにされている。

話題の展開方法に関する研究では、Watanabe(1993)のものがある。そこでは、日本人の話し合いとアメリカ人の話し合いを比べ、日本人は本題に入る前に議論の仕方を論じるという特徴が示されている。この研究では、日本とアメリカのように異なる文化の下では、話題の展開方法も異なることが明らかになった。

本研究では日本の「ゼミ」という枠組みの下で、論文講読などの際にどのような話題展開の規範があるかを明らかにし、留学生の授業参加の一助としたい。

2. 分析手法

2.1. 分析の枠組み

会話の分析観点の一つとして、話題^②の展開構造が挙げられる。話題に着目した会話分析は数多くあるが、村上、熊取谷(1995)はそれらを主に、隣接対の連続から話題を捉える「線状構造」を明らかにするものと、テキスト分析的な視点から話題を捉える「階層構造」を明らかにするものの二つの観点に分けている。「線状構造」を明らかにするための分析観点としては、話題提示の際の話順獲得方法と、前の話題との内容的関係のふたつが挙げられている。一方、「階層構造」は会話全体の流れから話題を分析した研究であり、複数の話題が集まってより大きな話題を形成しようという考え方を基に成立するとされている。

「階層構造」は直前の話題との関係だけでなく、会話全体との関係を示すと考えることができる。村上、熊取谷(同上、p.107)から階層構造のみを取り出して図に示してみる(図 1)。一連の小さい話題が集まり、より大きな話題を形成していることがわかる。ここに出てくる話題で実際に話されているものは話題 a、d、e、f、g、h、i、j であり、話題 b、c は小さい話題をまとめたために作られたカテゴリーである。線状構造による分析では話題 a、d、e、f、g、h、i、j は全て同じ派生^③の関係であるが、階層構造による分析では話題 a と d の関係は、話題 d と e の関係とは明らかに異なる。このように、階層構造による分析は、会話全体から見た各話題間の内容的な繋がりを捉えようとしたものであり、会話全体がどのように変化していったか、どのような一貫性を持っていたかを明らかにすることができる。

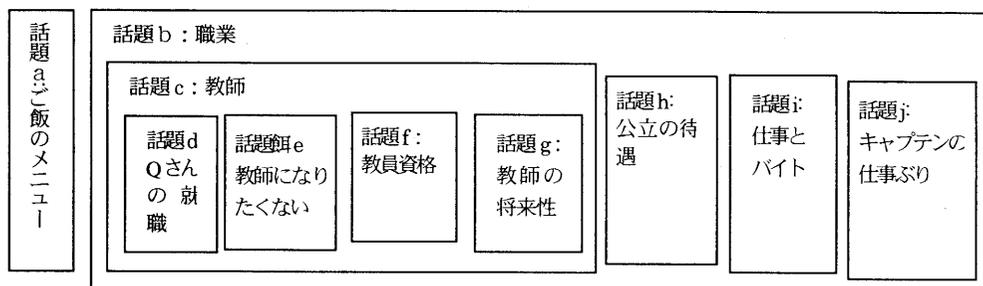


図1 話題の階層構造(村上、熊取谷のものを下に作成)

そこで、本稿では階層構造を中心に各話題間の関係を分析する。村上、熊取谷(1995)は、雑談を分析対象として、階層的な構造の大きさや段階について規定的に言うことはできないとしている。しかし、本稿で取り上げるものは授業の会話であり、計画的で、会話の目的が存在するものであるため、階層構造に何らかの規定が見られる可能性がある。

2.2. 分析データ

本研究では大学院の日本語教育の授業、90分間の会話を3回に互って採録した。採録した授業は参加者18人が3、4人のグループに分かれて論文購読、論文についての意見交換、クラスメートの発表への意見交換などを行っているものである。時間は約20分から40分で、参加者の偏りがないように考慮して4本を分析対象とした。内容は各回ごとに異なるが、主に言語、文化、会話などに関するものである。

この他、会話参加者全員に、授業をどう捕らえているのかを知るためのアンケート調査を行った。アンケートは自由記述形式で、内容は、グループで話すときとクラス全体で話すときそれぞれについて「授業中の発言で気をつけていること」に答えを求めているほか、「グループ活動の利点は何か」、「全体的話し合いで気をつけるがグループの話し合いのときにしないことは何か」という質問をしている。

3. 分析結果

3.1. アンケート結果

アンケートの結果、時間配分、言葉遣い、話の流れ、雰囲気と言及する答が多かった。全体活動での話し合いで気をつけることとして数多く挙げたものが、話の流れがどうなっているか、自分の質問やコメントがその場のタイミングに合っているかを考えるというものであった。また、クラス全体で話すときはある程度まとめてから発言するのに対し、

グループの場合、思いついたままに、考えながら話すといった答が目立った。

3.2. 話題の変化の分析

話題の変化を分析した結果、アンケートの「グループでの話し合いではあまり気を使っていない」というコメントに反して、学生は、一定の規範を持って授業に参加し、発言していることが明らかになった。ここで見られた規範については、次の順に説明する。

1. 話題の選択：会話参加者はレジュメや講読文献の内容と関係のない話はあまり長く話さない。このことから、会話参加者は内容によって長く話すものとそうでないものを選別していると言える。
2. 話題の派生：授業中と雑談では、話題の派生の仕方が異なる。
3. 派生に見られる規範：「話す内容は、レジュメや講読文献の内容から離れすぎてはならない」という規範の下に話し合いがなされている。

3.2.1. 話題の選択

次に示す会話は、「レジュメや講読文献の内容と関係のない話題はあまり長く話さない」という規則を示すものである。この会話は前回の授業で読んだ文献に関して話しており、その中で出てきた「文化」という言葉の扱いが初めの話題になっている。

会話1

話題 1	1A: 文化としてできかかっているものとできかかってないものがあるんじゃない?
	2B: 定着しているって意味?
	3A: そうそう
	4C: あー定着してるってことか、あーそっか、そっか、原文読んでないから、英語が、ねえ、あれよくわからないけど
話題 2	5D: 嫌に堂々と言うなあ (笑)
	6C: 堂々と行ってしまった、今のCじゃありません (笑)
	7B: オッケー
話題 3	8C: 今のBです、なーんて (笑)
	9B: んー、ということ[だと思っんですが、
	10C: [あ、ということなのかな

この会話の話題は3つに分かれている。話題1は「文化について(1から4まで)」で、講読

文献の中で使われている「文化」という言葉がどのような意味であるかについて話している。話題2は「Cの態度について(5から8まで)」である。ここでは、Cが文献を読んでいなかったと言ったことに対し、Dがテープレコーダーが回っていることも含めて、授業のためにやるべきことをしていないということを平気で口にしたCの態度を指摘している。それに対してCはテープレコーダーに向かって自分が言ったのではないという冗談を言っている(実際には声で自分であることは明らかであることはわかっている。)。冗談で笑った後に、会話は話題3に入る。ここでは再び、講読文献に戻り、文化について話を続けている。

この会話を階層構造で示すと、次のようになる。

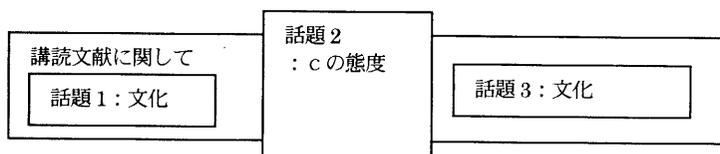


図2 会話1の階層構造

話題1と話題3は同じ「文化」に関する話題であるが、その間には話題2があるため、話題1と話題3は異なる話題となっている。その一方で、話題1と話題3は「講読文献に関する話題」という、より大きな話題に内包されている。この大話題には、話題1と話題3のほかにも多くの話題が内包されうる。話題2は大話題に属さないが、時間的には話題1と話題3の間にある話題であるため、図のような形で講読文献に内包されない。

では、話題2は、会話の中でどのような特徴を持っているだろうか。話題2は講読文献に属さない話題であるため、このこの話題の特徴で、文献やレジメに属さない話題がどのように扱われるかが明らかになる。まず、話題2は長く続かず、派生もしていない。次に、9でBは断りもなく直前の話題を打ち切り、4以前の話題に戻っている。直前の話題を打ち切る際には、前の話題で話している者の面子を保つ意味もあり、何らかの話題転換のマーカがあるのが一般的だが、ここでは何のマーカもなく新たな話題が始められている。また、話題3は、「ということ」というあいまいな表現で始められているが、これに対してA、C、Dは大きな混乱もなく、前の話題の「文化」に関するものであることを理解している。これらのことから、会話参加者たちは話題2が長く話すべき話題ではないことを知っていたということが窺える。つまり、文献やレジメに関するものではない話題は短いやり取りのうちに終わり、もとの話題に帰っていくことが会話参加者たちの暗黙の内

のルールであるということができる。

3.2.2. 話題の派生

前節で、レジユメ、文献に関係のない話題は派生しないという会話の特徴が見られた。では、レジユメ、文献に関する話題に内包される話題はどのように派生するのであろうか。派生のし方に現れる規範を以下に示す。

次の会話は会話分析に関するレジユメをもとに話しているものである。ここではレジユメ中の「会話のゴール」という言葉から、会話にゴールがあるか否かが問われており、さまざまな会話やその目的について話し合われている。

会話2

話題 1	1A: なんか、かい、会話って言うと、ゴールあるのかなーって[素朴に、思いました 2B: [んー 3A: なんか[会議と[か、ねえ 4C: [ん [うん 5C: そうねえ
話題 2	(中略①: 授業中の会話のゴールについて) 6D: あのー、結論が出るゴールと、 7B: うん 8D: それと、話したことが、ある程度みんなが満足いったっていうゴールと 9C: あー 10D: 二通りあると思うのね (中略②: 二種類のゴールについて会話の例を挙げる) 11C: まあなんとなく、[、てとこかな 12A: [気晴らし 13D: 気晴らしができた(笑) 14B: そうねー
話題 3	15D: 話す内容だけじゃなくって、内容以外のところでゴールがあるね、それ 16B: うん 17C: うん、そういう[、そういう結構あると思う 18D: [うん 19C: で、満足が行くって言うことが、すごく、際限なく永遠に話すわけではないと思うからある程度やっぱり時間との兼ね合いで、 20B: うん 21C: まあもうそろそろ一時間話したことだし、何かいいかなって感じもちよっと入ってくるよね 22D: んー 23B: んー 24B: 後こう、一通り話し終わっただとか

	25D: そうね[一通り[網羅した
	26B: [うん [うんうんうん
	27D: 吐き出せるだけ[吐き出したとか
	28B: [そうそうそうそう
	29C: んー
話題 4	30D: でもそういうのが終結にむかう時って、なんとなく、わか、お互いに納得しながら、そろそろ終わりだなっていうのがわかるでしょ
	31A: うんなんとなくわかるね
	32D: 電話なんかでも
	33C: 時々切れなくて困ることあるけどね (笑)
	34C: かたっぽは切りたいんだけどね
	35B: んー
	36C: 早く(笑いながら)
	37D: こーなってきて、またポンて入って[きて
	38B: [うん、そうそうそうそう
	39C: [(笑) (笑)
話題 5	40A: 何らかのサインは送っている[よね、言語的な、もので
	41C: [んー
	42D: うん
	43C: それに気づいてくるれかどうかだよね (笑)
	44B: んー、んー
	45A: なんかこう、まとめようとするとか、 (笑)
	46A: じゃあ、明日はこうこうね
	47C: うーん
	48B: うん、もとのなんか話しに[なるとか
	49A: [そうそう戻ってるとか、
	50B: うん、[うん
	51C: [そうね (間 1秒)
	52A: そういうサインで、あるよねきっと
	53B: うん
54C: これ、今の話だとどういうゴールに向かうんだろうね	

ここでの話題は話題1「会話のゴール(1から5)」から始まり、話題2で「二通りのゴール(6から14)」、話題3で「内容以外のゴール(15から29)」、話題4で「話の終結(30から39)」、話題5で「終結のサイン(40から53)」と展開し、54で再び「今の話のゴール」とゴールに関する

話題に戻っている。話題1の「会話のゴール」はレジюме内に書かれていた言葉であるが、その言葉を理解しようとして話している過程で話題が派生していったものが話題2,3である。話題2は、話題1の疑問に答えるために例を挙げて自分の意見を言っている。話題3は、話題2の内容を受けて、それに対する感想を言っている。つまり、直前の話題2を受けて初めて生じた話題であり、話題2がない場合、話題1から3へと派生することはない。このように、話題2、話題3は直前の話題のみとの関係が強く、それ以前の話題との関連ははっきりしない。このような話題の階層構造を図で表すと次のようになる。

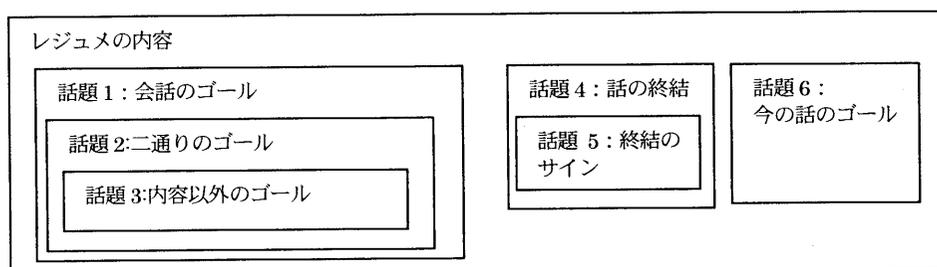


図3 会話2の階層構造

図1と比べると、話題の層の特性が異なることは明らかである。会話1で層を成している話題(話題b、c、d)では、外枠を成す話題はいくつかの話題をまとめて大きい単位で一つとしたものであるが、会話2で層を成している話題(話題1、2、3)では、直前の話題が外枠になっている。話し合いの内容を見ると、話題2、3は話題1を受けて初めて出現しうる話題である。仮に話題1無しに話題2が現れたり、話題2無しに話題3が現れた場合、参加者は理解することができないだろう。このことから、話題1は2を、2は3を内包する話題であると考えることができる。つまり、図1における外枠の話題はその中の話題を「まとめた形」であるのに対し、図2における外枠の話題は中の話題を「内包した形」であるといえることができる。

会話1において、派生によって連なる話題d、e、f、gは会話2の、話題1、2、3の派生とは性質が異なる。メイナード(1993)は、会話の展開パターンを「単純テーマ展開パターン」、「同一テーマ展開パターン」、「派生テーマ展開パターン」に分けており、「単純テーマ展開パターン」はある話題の中に出てきた言葉を受けて新しい話題が展開されるもの、「同一テーマ展開パターン」は同じ話題でやり取りが展開されるもの、「派生テーマ展開パターン」は全体に通じる大きなテーマがあり、それに関連したテーマが連なるものとしている。④メイナ

ードの会話展開パターンに照らし合わせると、会話1は派生テーマ展開パターンであり、会話2は単純テーマ展開パターンである。このことから、雑談における話題の展開と、目的をもった話し合いにおける話題の展開では、話題の広がり方が異なることが窺える。

3.2.3. 派生に見られる規範

会話2から、層の内側にあるものは、直前の話題との関連が強く、それ以前の話題との関係がはっきりしないことが見られた。このような、各話題間の関係を図にしてみよう。

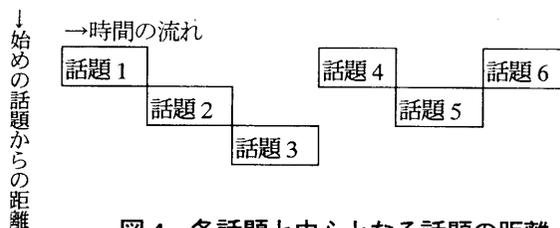


図4 各話題と中心となる話題の距離

図4は話題の変化を初めの話題からの距離という視点から示した図である。横の矢印は時間の流れを示し、会話は時間的には左から右へと推移する。縦の方向は会話の内容の解釈にもよるが、中心となる初めの話題からどれくらい離れているかを示す。

分析の結果、話題の階層は4層までであることがわかった。また、各層には、一定の特徴が見られた。話の始まりは「レジュメ、文献に関すること」であり、それを第1層とすると、第2層目は、「1層目のどの部分について話すか」、「どこに問題があるか」という、注目個所の指摘である。第3層は、「2層目に挙げたポイントに関する例や説明」で、第4層目は「3層目に対するコメント」である。4層目は冗談のように語られることも多く、派生をしない。データ中には5層目の派生につながるような発話もあったが、そういった発話は皆、他の話者たちからの反応が得られず、派生できなかった。こうした制限の理由としては、会話の目的を見失わないことが考えられる。話題の層を重ねるということは、もともとの話題から離れて行くということである。このために、授業中の話し合いのように、初めから話すべき話題がある目的のはっきりとした会話は、目的を見失わないためにも、派生に制限があると考えられる。

4.まとめ

階層構造を明らかにするために会話全体を視野に入れた各話題の特徴を分析した。そし

て、授業中においてどのような話題が派生をするかという点と、派生の型を明らかにした。その結果、学生はレジメや文献に関連した話題のみを派生させた。また、派生の型においても、レジメや文献内容から離れていくような話題の派生には層の数に制限があった。つまり、学生たちは「レジメ・文献に関すること」という階層構造の第1層に属さないものは派生をさせず、第1層に属するものはそこから離れすぎない程度の派生にとどめていた。これら二つの話題の規範は、授業目的から大きく外れるような派生はしないということを示している。

アンケート調査の結果では、グループ活動では「思いつくままに話をする」、「特に気をつけていることはない」といった記述があった。また、実際に会話を聞くと学生同士がかなり親しげで、盛んに笑いが生じているグループがあった。それにもかかわらずこのような制限が見られたことは、学生たちは無意識のうちに話し合いの態度を身に付けていると考えられるだろう。

5. 今後の課題

今回の分析では、授業中の規範を明らかにしたが、それがどのような要因から成るものは明らかでできなかった。そこで、規範を形成する要因を明らかにするために、話し合いに教員が参加した場合や留学生が参加した場合なども含めて、分析データをさらに増やし、規範が崩れる場面を分析したい。

次に、層の深まりにどのような意義があるかを明らかにしたい。授業の話し合いは、論文等のより深い理解や認識を目指している。層の深まりはと、取り上げられた内容に対する認識の深まりと何らかの関係があるのであろうか。また、授業は、ある内容をより深く知るとともに、新しい情報に触れるという役割もある。新しい情報により思考を活性化したり、新たな知見を得たりすることを目的として話し合いに臨む者あるだろう。こういった、創発性に話題展開のスタイルはどのように寄与しうるであろうか。雑談の場合と授業の場合とでは、話の内容にどのような認識の差が生じるかを分析し、話題の展開構造と認識の関連性を明らかにしたい。

注

- (1) 暗黙の了解の下に持っている行動のルール。norm(ノーム)とも言われる。
- (2) 村上、熊取谷(1995)の「話し手と聞き手のやり取りから成る発話の一まとま

りの中で、言及の対象となっている、ある特定の事柄」とする。

- (3) 村上、熊取谷(1995)では、「専攻トピックで言及された事象からトピックが選ばれ、これが話題として導入された場合」(村上、熊取谷:1995)としている。
- (4) ここで使われている「派生」は本稿で使っているものと意味が異なる。

会話の表記

- ・ (笑) は笑い声をさす
- ・ [は発話が重なっていることを示す。
- ・ (間 秒) は、誰も話をしていない時間を示す。

参考文献

- (1) 宇佐美まゆみ「性差か力 (power) の差—初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より—」『ことば』15号、pp.53-69、現代日本語研究会
- (2) 岡本能里子(1996)「日本語の留守番電話の談話構造—留守番電話に残されたメッセージの談話分析を通して—」東京国際大学論叢 国際関係学部編 第2号 抜刷
- (3) 村上恵、熊取谷哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62
- (4) 泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版
- (5) 茂呂雄二(1997)「発話の型」茂呂雄二編『知と対話—談話の認知科学入門—』pp.47-75、新曜社
- (6) Gee, J. P., Michaels, S. & O'Connor, M. C., (1992) 'Discourse Analysis', edited by M. D. LeCompte, W. L. Millory & J. Preissle "The Handbook of Qualitative Research in Education", pp. 227-291
- (7) Heath, Shirley Brice (1987) 'Questioning at Home and at School: A Comparative Study', edited by George and Louise Spingler "Interpretive Ethnography of Education: At Home and Abroad", pp.103-127, Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Publishers
- (8) Watanabe, Sawako (1993) 'Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions', edited by Deborah Tannen, "Framing in Discourse", pp.176-209, Oxford

(お茶の水女子大学)

The Analysis of the Norms of Topic Development in Class Discussion

OGASA, Emiko

This paper presents some features of group discussion in classes. Students try to make the class meaningful and have some rules to take part in the discussion, though they are not conscious. As a result, they follow some norms while taking part in a class discussion.

For analyzing the conversation, I concentrate on “hierarchical structure”. Murakami, Kumatoritani (1992) presented the significance of topics analyzed on the basis of “hierarchical structure”, which analyzes the content of topics as a part of conversation. They said that the topics have meaning in the context and position in the conversation.

As a result, I could see some rules in topic development. Conversation has one main stream topic which is about documents or papers. In the class, students discuss about them to understand them properly, and topics develop. And most of the topics have some relationship with the main stream. Though on the way to understanding the main topic, from some words, speakers do get side track, but soon return to the main topic. So it can be said that speakers can change topics and return to the main topic without notice.

(Ochanomizu University)